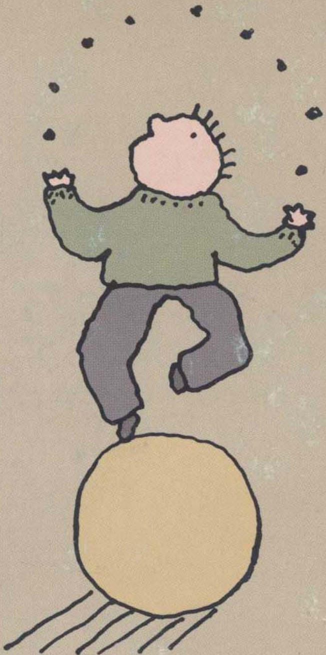
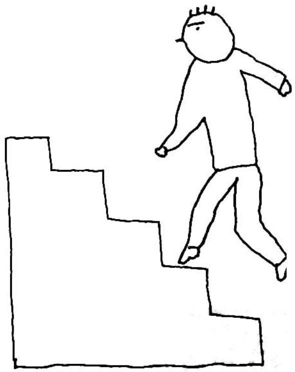
うらおもて人生録

色川武大



うらおもて人生録

色川武大



毎日新聞社

うらおもて人生録

定価九八〇円

昭和五十九年十一月十五日　印刷
昭和五十九年十一月三十日　発行

著　者　色川武大
編集人　川合多喜夫
発行人　関根　望
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　中央精版
製本　田中製本

© Takehiro Irokawa　Printed in Japan 1984

うらおもて人生録・目次

さて、なにから——の章　11
人を好きになること——の章　16
男女共学じゃないから——の章　21
速効性とはべつの話——の章　26
劣等生の弁——の章　31
学歴というもの——の章　36
俺の中学時代——の章　41
トコロテンB29——の章　46
優劣に大差なし——の章　51
もう手おくれかな——の章　56
戦争が終わった時——の章　61
掏摸になれない——の章　66
どこも辛抱できなくて——の章　71
プロはフォームの世界——の章　76

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一一三の法則――の章　81
九勝六敗を狙え――の章　86
立ちどきの問題――の章　91
黒星の算えかた――の章　96
運は結局ゼロ――の章　101
実力は負けないためのもの――の章　106
眺めるということ――の章　111
また予選クラス――の章　116
何を眺めるか――の章　121
無人島での関係――の章　126
嫁に行った晩――の章　131
まず負け星から――の章　136
負けてから打ち返し――の章　141
マラソンのように――の章　146

受け身と小手返し――の章 151
我は狐と思えども――の章 156
天使のような男――の章 161
俺は淀まないぞ――の章 166
だまされながらだます――の章 171
八百長じみた贈り物――の章 176
大きな得点を与えれば――の章 181
向上しながら滅びる――の章 186
一歩後退、二歩前進――の章 191
バックして走る――の章 196
自分から二軍に行って――の章 201
スケール勝ちが一番――の章 206
前哨戦こそ大切――の章 211
動いちゃいけないとき――の章 216

追い討ちはやめよう――の章 221
先をとること――の章 226
勝ち癖負け癖――の章 231
一病息災――の章 236
一病の持ちかた――の章 241
つけ合わせに能力を――の章 246
欠陥車の生き方――の章 251
最高の生き方――の章 256
野良猫の兄弟――の章 261
お母さま方へ――の章 266
桜島を眺めて――の章 271
球威をつける法――の章 276
おしまいに――の章 281

装幀・和田　誠

はじめに——

最初に申しあげます。私は不良少年の出で、どこから見ても劣等生であります。したがって俗にいう劣等生諸君に親愛の情を抱いており、劣等生にしゃべりかけているときが一番気楽に、率直に、物事をしゃべれるような気がするのであります。で、この本も、学校の成績でいえば十番以内のエリートよりも、それ以下の成績の若者を念頭において記しだしました。

けれども私は劣等生をみじんも軽く見ておりませんし、自分を愛するごとく愛しております。それに、優等と劣等は、特長のちがいはあるにしても、本質的決定的にちがうとは思っておりません。原則的なセオリーは一緒のはずであります。ですから私自身はまぎれもない劣等生ではありますが、読んでくださる若い諸君（お母さまも含めて）は、あまり優等劣等にこだわらずに読んでいただきたいのです。

今、セオリーという言葉を使いましたが、私はこの本では、生きていくうえでの技術に焦点を合わせたつもりでおります。しかし、生きていくということは、もちろん、技術だけの問題ではありません。どう生きればよいのか、どう生きたいのか、そうするにはどうすればよいのか、自分が生きる姿勢を定めるための諸問題が山積みしており、特に若い人に向かって人生を語る場合、そのことの重要さを私自身もしみじみ感じます。

ですが、ここではその問題を意識的に捨てました。率直にいって、私には、若い人の思想を誘導できる自信がありません。私自身は自分が育ってきた時代、環境、気質などによって、自分が選択し、育ててきた内心の方向のようなものがありますが、それを他人に押しつけることの怖さの方を人一倍感じてしまう始末です。私はその器ではありません。思想めいた、或いは道徳めいたことの示唆がこの本に欠落していることの御批判もありましょうが、それは読んでくださる方が、ご自分の問題としてじっくり定めていくより仕方のないことのように私には思えるのです。無責任ないいかたをお許しください。

ただし、そのかわり、この世の原理原則、不確実でないと思える部分については、一生懸命に記さなければならないと思いました。原理原則をさとったから、それで解決するわけではありません。むしろ原理原則は愛嬌のないもので、人間の望みに一から十まで沿っているとは限りませんから。

にもかかわらず、原理原則は、例外なしに誰にも共通した部分であり、ここをとにかく認識して、そのうえで、原理原則に立ち向かう人間の自主的なものを造成していく、そういう手順かと思います。ですから技術論というよりは認識論ということになりましょうか。

それにしても、無学な私が記しますことで、学問的でもなく、下品な例証ばかりで顔をしかめる方もおありでしょう。まァしかし、泥の中にも花と申します。たった一行、一語でも、若い人々のご参考になれば、これにすぎる喜びはありません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うらおもて人生録

さて、なにから——の章

さて、どんなことからしゃべりはじめようか。

俺、無学だからね。それから、特にはっきりと、他人のために役立つことをこれまでしたおぼえもないしね。それでもう五十すぎで、くだらん男なんだよ。俺なんかの商売は、しょっちゅう活字に名前が出るものだから、時に偉そうに見えたりすることもあるかもしれないけれど、俺なんかはそんなんじゃないんだ。まァ、ピエロに近い。ピエロだって、特に軽蔑するにも当たらんけれど、普通の大人たちから見ると一種の欠陥車だからね。俺と話をするときに緊張することなんかないんだよ。

俺は、人に何かを教えようなんて思ってないよ。ただ、俺のことをしゃべるだけだよ。でも、君たちとは時代もちがうし、俺はもう古い人間だし、かみあわないことや、退屈な話がたくさん出てくるだろうね。それから、俺の欠点もたくさん出てくるだろう。でも、できたら、我慢して聞いておくれよ。こんなことをいうと嫌われるのはわかってるんだけれど、俺は、君たちと、友人のような関係になりたいと思ってる。どこか一点でも気の合いそうなところがあったら、しばらく俺の話につき合って欲しい。へんな奴でも、だんだん馴染(なじ)んでくると、いつか友人になってしまうものだよ。そうして、友人は多ければ多いほどいいんだ。悪友が混じってたってかまわないよ。友人というものはね、いうならば、話相手なんだ。もちろん、俺も君たちの話をたくさん聞きたいよ。手紙でもくれて、自

分の話を聞かせてくれれば嬉しいね。

俺ね、子供を作らなかったんだ。若いときにね、もうどうにもしようがない男で、どういうふうにしようがないかというと、普通の生き方なんてとてもできそうもなかったんだね。それで、こんな俺は、とても子供を作る資格なんかないし、かりに作ったとしても満足に育てられるような気がしなかった。俺みたいな不良少年あがりは、子供は、存外に、ちゃんと育てたいんだ。ふだん口に出さないけれども、内心でそう思ってる。ところが、ちゃんと、というのが、どうちゃんとなのか、どんなふうにすればいいのか、むずかしくてよくわからない。

それで、子供を作らなかったことを、ああ、よかった、と思っているわけでもないし、悔んでいるというわけでもない。赤ん坊の感触はいいな。けれども、子供が好きな方じゃない。実感としては、俺の子供がもし居たら、気味が悪いな、と思う。そのくせ、かつて無駄に流したりおろしたりした水子が夢に出てきたりもするよ。まアこれは、老境の感慨にすぎないな。

子供がないと、自分の年齢を忘れていることが多いな。普通は、子供が育つにつれて自分の年齢を意識し、またその年齢らしいふるまいをせざるをえなくなるのだろうけどね。そういうことがないから、正月と誕生日ぐらいしか年齢を思い出さない。いつまでたっても、気持ちは不良少年のままさ。

もうひとつ、子供がないとね、若い人を見ると、皆、自分の息子や娘のように思えるんだよ。不思議だねえ。女は自分で産むからそのへん少しちがうだろうけれど、男は、そういうところはいいかげんだからね。よく考えてみりゃ、誰の子だってたいしてかわりゃしないんだ。

これも、嫌われそうな言い回しだけれども、俺、なんだか、やたらめっぽう、誰にでも優しくしたくてしようがないんだ。もちろん、それはむずかしいよ。それに、俺は、ふてぶてしいところや自分

勝手なところがあって、特に優しい人間だと思ってるわけでもない。だから、なおさらそうしたいのかな。そうできれば、皆を愛することができたらどんなにいいだろうと思う。思うだけじゃなくて、気持ちだけはそうなってる。

多分、もうそれほど長くは生きられないからだろうな。無茶苦茶なことばかりやってきたから、身体がもう駄目さ。遊び人の五十歳は普通の人の七十歳だよ。もう十数年前から、ああ、これが最後の正月だな、これが最後の桜だな、これが最後の仕事になるかもしれないな、そう思いながらすごしてる。昔の友人はあらかた死んじゃったよ。皆、遊び人だから、早いんだよ。俺は何も信仰してないから、あの世なんてない。死ねばそれっきり。それで、以前とちがって、死ぬことが、なんだかあたたかい布団の中に入るような気がしてきたんだね。

だけれども、こんなふうに年をとる前から、やっぱり、誰かに、誰ということなく、優しくしたいという気持ちがあったんだ。そのくせひどい仕打ちをしちゃったり、勝手な真似をしたり、あるときは、優しくしたいという気持ちを邪魔なものに感じて居たりしてね。今、こんなことがいえるのは、いくらか自分に余裕ができたせいなんだろうか。俺は、しゃべっているうちにだんだん君もわかってくるだろうけれど、本当に今も綱渡りでね。その日暮らしなんだ。それでも昔にくらべれば、余裕なんだろうね。誰だって、人を愛したいし、自分も大切にしたいよなァ。その方が気分がいいぐらいわかってるんだけども、なかなかそうできないんだよなァ。

昔、小学校に行ってる頃、一年上の男の子を好きになっちゃってね。ホモじゃないんだが、なんだか好きもしいいんだ。

池田って子だったな。授業と授業の間の短い休み時間は、校庭でドッジボールと相撲さ。野球は放

課後。クラスごとにグループを作ってあっちでもこっちでもやってる。俺は一学年上の相撲のグループをいつも眺めていた。誰も、眺めてだけ居る奴なんて居ないんだ。俺だって、みっともないからね。それに、どうしてお前はやらないんだ、って問われても答えにくいからね、しばらく眺めていて、立ち去るふうを装うんだが、一人一人の取り口や個性がわかっていて感情移入してるもんだから、遠くからこっそり眺めたりして結局全部見てる。向こうもへんな子だと思ったろうな。

池田って子はね、痩せてて実に体がやわらかい。ただ、体力も膂力もないもんだから、ねばりこむんだが、いつも勝ったり負けたりさ。身体を弓なりにそらしてね、得意は打棄り。コンクリートの上に白墨で円を描いただけの土俵だから、俵でふんばれるわけじゃなし、打棄りなんて決まり手はあまりないんだ。池田くんはいつもそり身になってね、相手と一緒にもつれて、地面に叩きつけられる。それで怪我ひとつしないでゲラゲラ笑ってる。

あの蒟蒻みたいな身体や、笑顔や、もうなにもかも好ましいんだ。俺は自分じゃやらなかったけど、どうすれば勝てるか、眺めてるうちにコツはわかってくるんだけどね。でもそんなことして勝ったってしようがない。本当は俺は、池田くんみたいになりたかったんだな。どの相手とも、自分の特長ひとつで戦って、きわどいところまで持ちこんで、勝ったり負けたり。

小さなことなんだけどね、四十年以上たった今でもそのグループのさまざまな情景をはっきり憶えてる。その頃は女生徒とはクラスがちがうからほとんど接触の機会がないからね。だから女の子というと、夢想する性質のものだったな。それで男の子の方を現実に好きになる。もっともこれは俺だけのことかもしれないけどね。同じクラスでも何人かの男の子を好きでね。そういう気持ちははずかしいから絶対に態度には出さない。けれども今になってみると、池田くんや、あと何人かの人を好きに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.